

## スペイン黄金世紀文学と日本

野 間 一 正

### 一、スペイン十七世紀文学―黄金の時代

スペイン文学における黄金時代又は黄金世紀と称されるのは、一五五〇年代から一六八〇年代を指している。

作者不明ながら、力強い写真と鋭い批判精神に貫かれた『ラサリリーヨ・デ・トルメス及びその幸運と逆境の生涯』が一五五四年に出版されたが、これはピカレスク（悪漢）小説の嚆矢となった。対照的に精神の内面を重んずる神秘文学が花開いたのも十六世紀後半である。十七世紀には、小説ではセルバンテス、ケベード、詩ではゴンゴラ、演劇ではロベ・デ・ベীগ、テイルソ・デ・モリーナ、ルイス・デ・アラルコン、カルデロン・デ・ラ・バルカなど、鬼才、天才が輩出した。バロック演劇を代表するカルデロンの死をもって黄金時代は終る。

絵画においても、一五八〇年ごろから一世紀の間に、エル・グレコ、リベラ、スルバラン、ベラスケス、ムリーリョなど巨匠の活躍した時代である。

政治的にみると、十六世紀後半は、フェリーペ二世の

時代（一五五六―九八）で、ヨーロッパと海外に広大な領土をもち、八一年にポルトガルの王位を兼ねるようになってからは、文字通り太陽の没することのない帝国となった。しかしながら、超大国の国際的責任と内部に抱える矛盾から戦争と内紛がつづき、父カルロス一世（神聖ローマ帝国皇帝カール五世）から受継いだ負債も累積し、政治面の覇権とは裏腹に経済面では破綻をきたしていた。十七世紀はその付けが回ったというか、どの国王も指導力がなく、スペインは列強の草刈り場となり、政治面でも経済面でも没落の一途をたどる。

日本史の「キリシタンの世紀」といわれる時代は、右に述べた時代と重なっている。

### 二、異文化理解のために

日本がヨーロッパと出会って四五〇年になる。その六年後、即ち、一五四九年八月フランシスコ・シャビエルが鹿児島に上陸する。

ポルトガル人が種子島にもたらした鉄砲は、模倣・改良のち大量に製造され、わが戦国の世の戦術に大きな影響を及ぼした。技術改革にかける日本人の情熱は昔も今も変わらないのであろうか。

シャビエルが来日する前すでにポルトガル商人が九州の諸港に渡来しており、シャビエルは、彼らから日本に関する情報を集めている。シャビエルは、品物を売買するためではなく、エワンゼリオ（福音）を伝えるのを目的として来たのである。エワンゼリオを人々の心に届ける手段は言葉であり、更にメッセージを正しく伝えるためには、布教地の生活・風俗・文化・歴史などを理解することが必要である。シャビエルの場合はどうであつたろうか。

シャビエルは、<sup>(1)</sup>スペインとフランスが境を接するピレネー山脈の南西部ナバール王国のバスク人宮廷顧問官の子として一五〇六年に生まれた。シャビエル九歳のとき、ナバール王国はカステイリヤ王国に併合され、シャビエル城は破壊された（現在再建されている）。十九歳で故郷を後にしバリーで勉強中、イグナシオ・デ・ロヨラと親しく交わり、三四年ロヨラを盟主としてイエズス会を創立した。ポルトガル国王の要請をうけ、四一年インド布教のためリスボンを出帆した。シャビエルはリスボンを立つ前すでに数々の異文化体験をしている。しか

し、赴く先はヨーロッパとは全く異質の社会である、カルチャー・ショックは想像を絶することであつたであらう。インド諸地方の布教において、積極的にインドの文化を理解し、その社会に順応しようとした。土地の言葉の習得に努め、教理書をマラバール語とタミール語に翻訳させた<sup>(2)</sup>。しかし、ポルトガル人植民者の生活態度が布教の妨げとなり、シャビエルの思うようには捗らなかつた。シャビエルは、マラッカ更にモルッカ諸島まで布教に赴いた。そして、モルッカ諸島からマラッカへもどつた四七年、人を害し追われていた鹿児島出身の侍ヤジロウに会う。それまでの布教地ではみられなかつたヤジロウの高い知性と人柄に接して、シャビエルは、ポルトガル国王の布教保護権の外にある地ながらも、日本伝道に希望をもつた。そこで先ず、ヤジロウをゴアの聖パウロ学院に送り、ポルトガル語とキリスト教を学ばせた。この間、ヤジロウは、カテキズム（教理問答）の翻訳本を作り、マタイによる福音書を邦訳した<sup>(3)</sup>。そして二年後、ヤジロウを案内人とし、スペイン人トーレス（トルレス）神父とフェルナンデス修道士を率いて来日した。フェルナンデスは、一応日本語が話せたようで、のちに独力で日本語辞書と文典を編纂した。

シャビエルは、鹿児島からの第一報で日本の印象を次のように述べている。

「私たちが交際することによって知りえた限りでは、この国の人びとは今までに見えられた国民のなかで最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだでは見つけられないでしょう。……日本人は、キリスト教の諸地方の人びとが決して持つていないと思われる特質を持っています。……すなわち、名譽は富よりずっと大切なものとされているのです。」<sup>4)</sup>

良いことばかりでなく、日本語ができなくてもどかしがっている様子も記してある。シャビエルの日本布教への熱意と彼の定めた布教方針は、後につづくイエズス会士に大きな影響を与えた。シャビエルは二年余り滞在のち日本を去ったが、その際ヨーロッパへ派遣する日本人留学生を同道した。その中の一人、鹿児島ノベルナルドは、ローマを訪れ、五七年ポルトガルの大学町コインブラで没した。

一五七九年に來日したイエズス会巡察師ヴァリニャーノは、学識と鋭い洞察力をもち、シャビエルの精神・布教方針を継承し、企画をたて実行に移した、シャビエルに次ぐすぐれた人物である<sup>5)</sup>。日本人による日本人のための教会をめざし（日本人司祭第一号は一六〇一年誕生）、ヨーロッパ人宣教師は日本の風習に順応すべきとし、三段階の教育機関を設置した。そして、天正少年使節を派遣（一五八二—九〇）。帰朝にあたり、活版印刷機を招

来するとともに、使節に随行した二名に印刷術の修得を命じた。この機械で印刷された書物が所謂キリシタン版で、迫害をくぐり抜け三二点が現存する。この印刷機で、十六・七世紀日本語研究上必見の書である、日葡辞書やロドリゲスの日本大文典、教理書や信心書、更に日本古典や西洋古典まで出版した。『ドチリナ・キリシタン』は国字本・ローマ字本合せて四度も刊行されているが、この教理書を読み理解する能力が知識層のみならず庶民層まで広がっていたことを示している。<sup>6)</sup>例えば、ヌエバ・エスパーニャ（濃昆数般のびすはんや、現在のメキシコ）では、絵によるカテキズモの本で教理を学んでいたことと比較してみれば明らかであろう。

### 三、ルイス・デ・グラナダー邦訳された

#### 最初のヨーロッパ文学者

邦訳された最初のヨーロッパ文学は、先述の天正遣欧使節により舶載された活版印刷機により一五九二年天草で出版された、ローマ字本『*Fides no Dōx*』ヒデスの導師』（信心録）である。ドミニコ会士ルイス・デ・グラナダーが一五八二年サラマンカで出版した *Introducción al Símbolo de la Fe*（信仰要綱序説）の抄訳である。序文の署名者ペドロ・ラモンは、スペイン人で当時在日十五年、臼杵修鍊院初代院長をした神父で日本人信徒の

協力をえて翻訳したと考えられる。序に、

「夫れヒイデスは妙なる善にして、徳特に深し。我れつらつら之を物に比えて案するに、水の至って澄めるは魚棲み難く、人のあくまで賢き時は、その友希なる如く、このヒイデスの善も、徳の甚だ深きが故に、却て普く人の元づくこと難きもの也。是れ偏に科を以て人のナツウラ（天性）の損ねたるに依れり。されば、我れこの徳の世に普ねからざることを憂えて、たくみの拙きことを恥ぢず、老の疲れを顧みず、迷へる人を導かんと志にひかれ、ヒイデスの経と名けて、巻を四つに分ち、一部となして世に伝へ、かの善にこもる貴き妙なる理りを顕はし了んぬ。」

と、筆をとった趣旨と内容が四巻から構成されていることを述べ、その一つ一つにつき次のように記している。

第一の巻には、ナツウラの道理を以てヒイデスの理りを顕はし、又Ds（デウス）の御敬ひを勧むべし。第二の巻には、Dsの御心に叶ひ奉る誠の教はクリンタンのみに限って、余にはなしと書き載すべし。第三の巻には、ヒイデスの題目は多しと雖も、取りわき御主ゼスクリシントの御誕生、御バシヨン（受難）の義を論じてより、レデサン（贖い）とて、我等を救ひ扶け給はんため、道は様々多かるべけれども、Dsのゴロウリヤ（栄光）と人のアニマ（靈魂）のやまいを癒やす薬は此にすぎたるはな

しと顯はすべし。第四の巻には、このレデンサンを御成就あるべき趣を遙の昔より予てポロヘタス（預言者）を以て詔りありし事共を、御主ゼスクリシント、露も達はす遂げ給へば、早にのレデンサンの道をば達し給ふと知らしむべきもの也。<sup>98</sup>

原著者の自然神学者ルイス・デ・グラナダー（一五〇四—一八八）は、本名ルイス・デ・サリア。グラナダーの貧しい家庭に生をうけ、十九歳でドミニコ会に入会後、バリアドリードのサン・グレゴリオ学院に学ぶ。学院では、当代の代表的神学者となるバルトロメ・カランサやメルチョール・カノと交わる。また、神秘文学の先駆者福者フアン・デ・アビラを知りその影響をうけた。五七年ドミニコ会ポルトガル管区長に任ぜられ、学徳は一世に轟いた。ポルトガル高位聖職者に推輓されたが辞退し、著述と説教に従事した。アビラの聖テレジア（テレサ・デ・ヘスス）や十字架の聖ヨハネ（フアン・デ・ラ・クルス）などとともに、フェリーペ二世の時代に登場する神秘文学という新しいジャンルのスペイン文学を代表する作品を世に送った。ギリシア・ラテンの古典に通じ、随所に引用がある。ルイスの思想は、本来のドミニコ会のものというより、聖アウグスティヌスの思想や自然礼讃において聖フランチェスコの思想に近い。ルイスは『イミタティオ・クリステイ』をラテン語からスペイン語

に訳しているが、キリシタン版にも邦訳があり、『こんでむつすむん地』がそれにあたる。

一五九九年長崎で、ルイスのもう一つの代表作『ぎやどべかどる』（罪人の導き）の邦訳が、漢字・仮名文字により出版された。五六年の作品 *Guia de Pecadores* のポルトガル語訳（七三）からの抄訳である。序文に、  
へれいるいすといへる善人、ぎやどべかどると号して  
罪人を善に導かんと志を勵し、諸の学者常にのべおき  
給ふ退惡修善の道理を大方拾ひ集め、此書にこめて後代  
の亀鏡と備へ給ふ者也。  
とある。

邦訳書の一年前、ロンドンにおいて、フランシス・ミ  
アーズ Francis Meres による同書の英訳本が出版され  
ている。同訳書の扉には、すでにラテン語、イタリア語、  
フランス語訳あり（ポルトガル語については記述なし）。  
ここに英語に抄訳すと記してある。本書はヨーロッパで  
広く読まれたが、邦訳書も当時の知識階級によく読まれ  
オルファネールによると、キリシタンが家に所持してた  
えず読んだだけでなく非信徒まで喜んで読んだ。<sup>9</sup>

本書は、現世の栄華ははかないという思想に貫かれ、  
神の思寵が頼むべき唯一のものであることを説き、そし  
て善を勧める道を教えている。新村出博士によると、「流  
調な文章のうちに、和漢洋語を巧みに駆使し、詞藻も豊

かに雅馴な新文体を開いている。……宗教文学として又  
新翻訳文学としても、吉利支丹文学作品中で最も重要な  
地位を占めるもの」<sup>10</sup>である。シャビエル渡来後五十年に  
この名訳が出版されたのはシャビエル・ヴァリニャーノ  
とバトンタッチされた日本語・日本文化理解の熱意と方  
針が正しかったことを証明している。

#### 四、十七世紀ヨーロッパの文学と日本

関ヶ原の戦で石田三成が徳川家康に敗れ、三成に味方  
したキリシタン大名小西行長は捕えられて、三成、安国  
寺恵瓊と一緒に六条河原で斬られた。この行長を主人公  
とした、某イエズス会士作「日本王アゴスチーノ撰津守  
殿（ツニカミンドノ）」と題する悲劇の筋書<sup>11</sup>が一六〇七  
年ジエノバで出版されている。

イエズス会士がヨーロッパに送る報告書が莫大で、し  
かも宣教師により日本観がまちまちのため受取る側でど  
れが真実なのかと混乱を起こした。一五七九年来日した  
ヴァリニャーノは、日本から送る報告を整理して年報に  
まとめることを決定した。海賊、船の沈没とか不慮の災  
難を予想して、この報告書は三通、のちには四通コピー  
し別々に送られた。修道院で食事のときこのような報告  
書や書簡が朗読されるが、海外で活躍する同じ修道会の  
仲間のことにつき正確な知識をもつことができる。この

劇も報告書をもとに書かれたと思われる。

ところで、ヨーロッパの文豪が日本を舞台にして書いた最初の作品は、一六一八年に出版された、ロペ・デ・ベーガの『日本諸王国における信仰の勝利』であろう。

ロペ（一五六二—一六三五）は、スペイン国演劇の創始者で、カルデロンとともに十七世紀を代表する劇作家である。女出入がはげしく、五二歳で司祭に叙階してのちも、美貌の女優マルタ・デ・ネバーレスと恋愛沙汰を起している。

多作家で、コメディア一八〇〇、聖餐神秘劇四〇〇も書いたが、今日残っているのは四七九の戯曲で、戯曲以外にも二一の作品を著わしている。素材も多様で、大西洋を渡ったこともないのに、『コロンブスの発見した新大陸』、『コルテスの征服』<sup>12</sup>等々、年代記や伝承に基づいた著作もある。『日本諸王国における信仰の勝利』もその中の一つで、ドミニコ会士オルファネルの「一六一五年三月二八日付報告書に基づいた殉教物語である」。

徳川家康は、政権についた当初は通商政策をとった。

一五九七年秀吉没後、伊勢に身をかくしていたフランシスコ会士ジェロニモ・デ・ジェズス呼び出し、マニラ・アカブルコ間を往来する船の浦賀寄港、ヌエバ・エスパーニャの銀精錬技術の導入など、フィリピンとの間に入り交渉するよう依頼した。しかしスペイン側は、宣

教師を送り込むのみで家康の希望を叶えようとしなかった。キリシタンの世界観や人間観が家康の意図する絶対的封建制と相いれないこともわかり、一六一二年の岡本大八事件を契機に徳川政権のキリシタン禁制が始まる。一四年に崇伝起草の「排吉利支丹文」が全国に布達され、迫害時代に入るが、ロペの作品は、この年有馬、有家、口之津で起った殉教を扱っている。

『日本最初の殉教者』という劇作がある。日本最初と言っても一五九七年の日本二六聖人のことではない。一六一七年殉教のアロンソ・ナバレーテのことで、ドミニコ会士として最初の殉教者の意味なのである。かつてロペ・デ・ベーガの作品と考えられ、一八九五年に王立アカデミーが出したロペ作品集に収められたが、カミングス（J.S. Cummins）教授の研究ではロペの作品ではない。『日本諸王国における信仰の勝利』はオルファネルの報告書の事実を外れないように書いているのに、『日本最初の殉教者』の方は全く事実を外れている。次のその概要を述べたい。

#### 『日本最初の殉教者』の概要

(14)

第一幕——太閤様(Tayco Soma)は六歳の一人息子秀頼(劇中では太閤(Tayco)を遺して死んだ。この息子は、帝位を奪った家康(Jisonen)のために、十五年間

大坂(Jugsa)塔内に幽閉される。秀頼は、毛皮をまとい野蠻人のように育ち、自らの出自も周囲の出来事も知らず、世間のことは老年の城代を通じて聞くのみであった。大名前田利家(Siguan)が家康を帝位篡奪者として非難している時、背教者大村(Bomura)の大名(喜前)は、前田が秀頼に期待をかけているキリシタンと陰謀をめぐらしていることを暴露する。家康は、(会見の際狂人を装った)捕囚の秀頼が帝位に危険のないことを知り、少しばかり自由を与える。そのため秀頼は自分の身の上を知る。そして幼時からキリシタンであったトマス之母、寡婦のキルドーラ(Guildora)という女性に恋をする。

フライ・アロンソ・ナバレテは、その頃日本布教区で活動している三修道会(イエズ会については無視)の長、指導者として知られていた。托鉢修道士たちは日本から追放されていたが、戻ってきてナバレテの下で秘かに布教しようともくろむ。

第二幕——篡奪者・家康もまたキルドーラに恋し、秀頼がしつとにかられてうっかり本性を表わしたために、家康は疑念を抱き秀頼に監視をつける。托鉢修道士たち変装して再入国し、ナバレテはキルドーラをからかっている家康に遭遇しキルドーラを援け出す。邪な皇帝は激怒するが、神秘的な力にしばらくはられてナバレテを射殺できず、復讐を誓いながら去る。ナバレテはキルドーラ

に、キリストの教えを説きキリスト磔の聖画を贈る。これをみて秀頼は、ナバレテが家康とキルドーラの仲を取りもったと誤解、その聖画が家康のものと信じ、キルドーラの手からひたたくって一木の樹にくぎ付けにする。その時聖画から血が迸って秀頼の顔にかかる。秀頼は、未知の神が自分を再び帝位につけるならキリシタンになると約束。大名・前田は家康に対して謀叛を企てる。

第三幕——フランシスコ会士が捕えられ、ナバレテではないかと訊問をうける。(ナバレテの伝記が述べられる)家康はロザリオを炉で燃やすよう命じ、ナバレテが現われ焰の中に飛び込むが、奇蹟によって救われるのち、宿主マンガシル(Mangazil)は三修道会(ドミニコ会、フランシスコ会、アグスチノ会)の聖服を運ぶ。托鉢修道士たちは少年トマスと一緒に処刑される。その後この殉教に関連のある叛乱が起って家康が殺される。最終場面では、フランシスコ会及びアグスチノ会殉教者に両側を守られナバレテが、「首と斬首に用いた斧を両手に持って」勝利の姿を現わす。秀頼はキルドーラと結婚し、兩人はキリシタンになることを約束するが、帝位につくまで秘密にしておかなければならない。

## 五、おわりに

最初の章で、十七世紀スペイン文豪の名前を列記した

が、彼らの著作の一つも当時の日本に紹介されていない。例えば、セルバンテス（一五四七—一六一六）の『ドン・キホーテ』の前篇は一六〇五年、後篇はその十年後に出版されている。また、ロペ・デ・ベーガ（一五六二—一六三五）に関して言えば、絶大な人気であったこの「才能の不死鳥」にたのみ、その麗筆によりヨーロッパ・キリスト教世界に日本の殉教を強く印象づけよう并希望したドミニコ会士ですら、その作品を翻訳しようとした形跡もない。因みに、慶長遣欧使節は一六一四年から十七年までヨーロッパに滞在している。キリシタン迫害期にあり、余裕がなかったとは言え、原因は宣教師が布教の扶けになるものしか将来しなかったことにある。ルイス・デ・グラナダの著作にしても、修養の書として邦訳したのであって、文学作品の紹介のためではない。

しかしながら、『ぎやどべかどる』の場合、大旨原文に忠実でありながら典雅な日本文になっているのは、日本語に通じたヨーロッパ人宣教師と文才のある日本人の協同作業の結果であろうと思われる。意図の有無に拘らず、それまでの日本になかったタイプの翻訳文学が誕生したとも言える。明治時代、カルデロンの名作『サラメアの村長』を邦訳した森鷗外の『戯曲の翻訳法』を読むと、目的も異なり時代も隔っているのに、翻訳方法の共通性を感じる。

十七世紀の俳聖松尾芭蕉の『奥の細道』の、「蕪村が俳画を添えて情趣豊かに写した日本文に、「一九九〇年度」ノーベル文学賞に輝くオクタビオ・パスの卓越したスペイン語訳文（林屋栄吉共訳）」（「広告による」）が近々東京で刊行されるという。一九五七年、同訳書のメキシコ版について、『イスパニカ』二号に永田寛定氏の書評が載っている。詩の翻訳は新しい詩を創造することである。詩人パスの訳詩はどうであらうか。

今回は紹介程度であったので、稿を改め個々に論じた。

#### 註

- (1) 従来日本語表記に、ザビエル、ザビエー、サビエル、ザベリヨ、サベリオ、ザヴィエル、シャヴィエル、シャビエルなど様々あるが、佐藤久平“De Exaberrri a Javier”《Más y Menos》No. XWによれば、バスク語 Eche-berri → Exa (Eña) → berri → Exabieri → Exabiere → Xabiere → Xabier → Xavier → Javier  
シャビエル又はシャヴィエルが正しい。なお、木下奎太郎は、『えすばにや・ぼるつがる記』でバビエル城（傍点筆者）と国名も地名も現代スペイン語読みをしている。

- (2) 五野井隆史「日本キリスト教史」（吉川弘文館）



- (3) 海老沢有道「日本の聖書」(日本基督教団出版局)
  - (4) 河野純徳訳「聖フランシスコザビエル全書簡」471頁  
(平凡社)
  - (5) Alvarez-Taladriz, J. L. 《Alejandro Valignano. S. I., Sumario de las Cosas de Japón》  
ヴァリニャーノ・松田毅一・佐久間正編訳「日本巡察記」(桃源社)
  - (6) 五野井「前掲書」
  - (7) Ricard, R. "The Spiritual Conquest of Mexico."
  - (8) 姉崎正治「切支丹宗教文学」(図書刊行会)
  - (9) オルフネル著井手勝美訳「日本キリシタン教会史」  
雄松堂
  - (10) 新村出「日本吉利支丹文化史」地人書館
  - (11) 幸田成友「悲劇アゴスチーノ撰津守殿」中央公論  
昭和8年12月号
  - (12) Morales Padrón, F. "Los Conquistadores de América"
  - (13) Cummins, J. S. ed. "Lope de Vega ; Triunfo de la Fee en los Reynos del Japon"
  - (14) Dominican Mission in Japan (1602-1622) and Lope de Vega"
- <sup>a</sup> なお、原文のローマ字綴りの個有名詞を、適宜歴史上の人物にあてはめ漢字に直した。
- <sup>g</sup> Boxer, C. R. and Cummins, J. S. "The